

<p>24日 (日) Ⅱヨハネ</p>	<p>「初めからわたしたちが持っていた掟、つまり互いに愛し合うということ…愛とは、御父の掟に従って歩むことであり、この掟とは…愛に歩むことです」(5-6節)。神の掟は、徹頭徹尾「愛する」こと。十字架のイエス・キリストを通して示される神の愛は、すでに私たちと共にあり、私たちの歩みを導いてくれている。「愛することは、神と共に歩むこと」。</p>
<p>25日 (月) Ⅲヨハネ</p>	<p>「愛する者よ、悪いことではなく、善いことを見倣ってください。善を行う者は神に属する人であり、悪を行う者は、神を見たことのない人です」(11節)。友を愛することは善いこと。自分たちの共同体の外から来た新しい友にも誠意をもって一緒に生きることが、見倣う善い業の一つと語られている。新しい出会いは、神の真理を見直すうれしい出来事。</p>
<p>26日 (火) ユダ</p>	<p>「わたしたちの救い主である唯一の神に、わたしたちの主イエス・キリストを通して、栄光、威厳、力、権威が永遠の昔から、今も、永遠にいつまでもありますように、アーメン」(25節)。日々の生活の中で神の道から外れさせようとする声があふれている。いつも唯一の神に集中することができますように。いつも喜びにあふれた者となれますように。</p>
<p>27日 (水) 黙示録 1章</p>	<p>「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。『わたしはアルファであり、オメガである』」(8節)。迫害の中、キリストの希望に生きることが無駄に思えてしまう、そんな時、神は、私たちの命の「最初から最後」まで責任を持ってくださると宣言される。その神は、世界の始めから、終わりの時まで私たちと共にいて下さる。</p>

<p>28日 (木)</p> <p>黙示録 2章</p>	<p>「耳ある者は、“霊、が諸教会に告げることを聞くがよい” (11、17、29節)。「耳ある者」は、主の言葉に心を向け、主のみ心を信頼し、祈り求める人。主の言葉は励ましに満ちた言葉。主の名によって迫害される群れに、主の勝利を、主の福音を、命の糧が備えられていることを約束される。主の言葉は私たちの命であることに期待して。</p>
<p>29日 (金)</p> <p>黙示録 3章</p>	<p>「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであらう」(3節)。主の食卓にいつも招かれているわたしたち。扉をこじ開けて入ってくるイエスさまではなく、わたしたちがその扉を開ける時を祈って待ってくださっている。</p>
<p>30日 (土)</p> <p>黙示録 4章</p>	<p>「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」(8節)。苦しみの中では、祈りも、賛美の言葉も口にできないときもあるかもしれない。天でささげられる礼拝は、いつも、主への賛美にあふれている。先の見えない暗闇の中に、主の光は必ずある。その光を目指して、祈りつつ歩みたい。</p>
<p>31日 (日)</p> <p>黙示録 5章</p>	<p>「わたしは、天と地と地の下と海にいるすべての被造物…がこう言うのを聞いた。『玉座に座っておられる方と小羊とに、賛美、ほまれ、栄光…が世々限りなくありますように』」(13-14節)。全被造物が賛美をささげる礼拝の壮大なスケール！しかし被造物への人間の傲慢の罪が、十字架の主(小羊)の犠牲によって赦されずしてどうして礼拝が成り立つだろうか。</p>